



画廊企画のこの展覧会には、菅沼緑（木にアクリル/15点） 崔恩景（油彩、テンペラ/10点） 寺崎誠三（写真/6点） 中村ミナト（アルミ/3点） 槇野央（木にアクリル/6点）というオーナー吉岡の「お気に入り」の作家が参加した。立体、絵画、写真、金属、木彫という、全く異なる分野の作品であり、年代も異なる作者が集ったにも関わらず、不思議な統一感が生まれた。

寺崎の人体の写真が菅沼の立体と呼応して浮遊感と沈澱間を生み出し、中村の彫刻は崔の絵画に吸い込まれ、浮かび上がってくる。槇野の素材感が菅沼と中村と在り方に反応して、単なる消費物の模倣ではなく、硬質なエッジが強調される。勿論これだけではなく、個々の作品同士の話が始まり、やがて総体としての会話となる。



嘗てもの派の展覧会を大阪国立国際美術館で見たが、一つの作品が空間を異化する筈なのに、密接に展示された作品同士が作品を異化するという、制作の理念を破壊した展覧会であった。ここに集った作品は当然もの派ではないのだから比較しようもないが、異なる作品が一堂に会して位相が照らし出されたのは見事としか言えない。



当然、個々の作品の力が強いことが前提となるのであるが、それぞれの作品が持つ個性と可能性を見抜いた吉岡の眼と、吉岡による展示方法が光ったのは言うまでもない。嘗てベンヤミンは『パッサージュ論』において、引用することによってそれが引用者の言葉になることを示唆した。

しかし今回の展示は、吉岡がキュレーションしながらも吉岡の作品でも、吉岡の空間にもならず、飽くまで、個々の作品の力が十分に発揮されたことに注目すべきであろう。近年、美術館若しくは評論家が歴史を捏造する場面に遭遇する。吉岡の姿勢を、私は見習いたい。

